



まるちあぐる
Vol.28

子どもの健全な学習を促す
コミュニケーション能力の育成をめざして

言語発達の研究を教育現場と共有

FOCUS 文学部教授

松井 智子
まつい ともこ

言語への興味から「語用論」の
研究へ

——先生が研究者の道に進まれた経緯
を教えてください

もともと言葉に興味があり、大学では英語学を専攻していました。当時は高校の教員になりたいと思っていたのですが、その前に英語力をもっと高めたいという思いがあり、英語圏への留学を決意しました。

留学先はロンドン大学ユニバーシティカレッジ(以下、UCL)。1年制の修士課程で、ここでも英語学を専攻しました。はじめの3カ月はイギリス英語が聞き取れなくて苦労しましたが、修了を迎えるころにはロンドンが大好きになっていて、このままここで勉強を続けたいという思いが強まっていました。また、苦労して書き上げたイントネーションをテーマにした修士論文が指導



教授に高く評価されたこともあり、そのままUCLで博士課程に進むことに。博士課程では、「会話の中で相手が言葉にしなかったメッセージを、どうすれば理解できるのか」「相手の言わんとしたことを誤解したり、自分が伝えたいと思ったことが相手に伝わっていないか」といったことが相手に伝わっていないか、興味を持ち、言語学における「語用論」という分野の研究に取り組みました。これが現在の研究のスタートです。

——「語用論」とはどのようなものか、
もう少し教えてください

人間のコミュニケーションにおいて

言語が使われることが多いのは当然ですが、実は一番言いたいことは言葉にしていないという場合がほとんどです。たとえば、男性が女性に「おいしいワインを飲ませる店が近くにあるんだけど」と言えば、それは暗黙の誘いになり得ます。それに対して女性が「ワイン大好きなんです!」と答えたとする

と、こちらは暗黙のイエスになり得る一方で、「明日、朝早いんです」と困った顔で答えた場合は暗黙のお断りになり得ます。大人の会話は大抵このような間接的なものの言い方で成り立っており、このプロセスを解き明かそうとするのが「語用論」です。

言語コミュニケーション発達の
研究でさまざまな子どもの
学習を支援

——子どもの言語とコミュニケーション能力の発達
の研究について教えてください

語用論に始まり、大人の理想的なコミュニケーションの認知的なメカニズムを研究する中で、子どもには皮肉が理解できないということが話題になり、子どもの言語コミュニケーション発達に興味を持つようになりました。そもそも、子どもが自己や他者の心を理解する能力については「心の理論」とし

早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。
ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部英文科修士課程修了。
ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部言語学科博士課程修了
(言語学博士学位取得)。国際基督教大学、京都大学霊長類研究所、
東京学芸大学国際教育センターを経て、2021年4月より中央大学
文学部教授。専門は言語学、発達心理学。

て1980年代から研究が進んでいて、「3歳児は推論できないが5歳児は推論ができ、8歳を過ぎたころからさらに複雑な推論ができるようになる」といったことが明らかになっていきます。コミュニケーション能力についても同様で、私も自分の子どもが生まれてからは「3歳児は親が言ったことをすべて文字通りに解釈する」といったことを肌で感じることとなりました。ですが、貧困などの問題から年齢相応のコミュニケーション能力の発達が見られない子どもたちもいます。だからこそ、私たちの研究結果を教育現場と共有していきたいと考えています。

——自閉スペクトラム症児やバイリンガル児を対象とした研究についても教えてください

自閉スペクトラム症児は、会話の相手と目を合わせることが苦手だったり、相手の話を文字通りに解釈したりするので、コミュニケーションがなかなかうまくいきません。でも、私たちの調査で、会話のイントネーションを聞き分ける能力は高いことがわかってきました。語尾を上げた疑問形の話し方をする人より、語尾を下げた話し方をする人のほうが、自閉スペクトラム症児の信頼を得やすいようです。また、定型発達の子どもは生後10カ月くらいで日本語の音声聞き取り、その中から単語を拾えるようになりますが、自閉

スペクトラム症児は単語や助詞を聞き分けるのが苦手な反面、英語のRとLの発音の違いなどを聞き分けることは得意であることもわかってきました。自閉スペクトラム症児に国語を教える際には、外国人に日本語を教えるようなアプローチが効果的だという一つの仮説が見えてきています。

バイリンガル児の研究を始めたのは、私とイギリス人の夫との間に生まれた子どもが、周りと比べて日本語の発達が遅いの気付いたのがきっかけです。昨今、グローバル化で国際間移動をする人が増えており、バイリンガル環境で育つ子どもも増えていきます。中でも、家庭の中で使われているのが一言語で、家庭の外で使われているのが別の一言語という環境で育つ子どもは二言語を習得するのに最も苦労することや、第一言語をある程度習得してからのほうが第二言語の習得が早いことなどがわかってきました。言語発達問題を抱えるバイリンガル児にはどのような支援が必要なのか、今後さらに研究を深めていくつもりです。

クリティカルシンキングで

グローバル社会を生き抜ける人に

——ゼミでの取り組みについてお聞かせください

今年度の前期のテーマは、「自閉スペクトラム症児の言語とコミュニケーション能力の発達」。もともと言語に興味があつて集まった学生ばかりなので、自閉スペクトラム症児がコミュニケーションに苦労しているだけでなく、言語発達においても問題を抱えていることを知り衝撃を受けていました。一方、身近に自閉スペクトラム症の人がいるという学生たちは、自分たちの学びが彼らのサポートにつながることに意義を見いだしていました。

また、自分がつたない英語で会話をする際、自閉スペクトラム症の人と同様に、言葉の裏にある意図まで汲み取りきれないという経験をしている学生も多くいます。それだけに、このテーマに対する関心は高かったようです。

——学生を指導する際に心掛けていることがあれば教えてください

無意識のうちに習得してきた言葉やコミュニケーション能力について考えるにあたり、まずは自分自身のこれまでを振り返ることが大事だと話しています。たとえば、幼少期に本の読み聞かせをたくさんしてもらった子どもは言語発達が進むとか、貧困で幼少期に親とのコミュニケーションが不足してた子どもは言語発達が遅れがちであるといった研究結果があります。自分の現在の状況をただ受け入れるのではなく、前提を疑って客観的かつ分析的に振り返るクリティカルシンキングの実践が重要です。

また、これからはグローバル化が加速していく時代です。多様な人種、文化を持つ人々とのコミュニケーションは避けて通れません。その際のツールとして英語などの外国語を学ぶことにとどまらず、多様な意見を聞く姿勢や自分の意見を発信する力も身につけてほしい、そう考えています。

そして、ぜひとも留学を経験してほしいです。外国語のスキルを高めることができるのはもちろんですが、自分と異なる考え方や文化を持つ人々との交流から学ぶことも多いはずですが、コロナ禍で実際に海外へ赴くことが叶わなかったとしても、オンライン留学をはじめWeb会議システムを使ったさまざまな国際交流のチャンスがあります。どうか積極的にチャレンジしてください。応援しています。

著書紹介

『子どものうそ、大人の皮肉』(岩波書店)

3歳ともなると子どもは一見会話らしいやりとりができる。だが、言葉で自分の意図をきちんと伝え、言葉から相手の意図を正しく理解できるようになるのはまだ何年も先のこと。それは大人にとっても簡単ではなく、誰でも失敗したことがあるはずだ。発達途上の子どもの言葉を手掛かりに、伝わる理由・伝わらない理由を探る。

